

Tobias Hecht,

*At Home in the Street:  
Street Children of North-  
east Brazil.*

Cambridge: Cambridge University Press, 1998,  
xi + 267 pp.

やま だ まさ のぶ  
山 田 政 信

はじめに

本書は、社会人類学者トビアス・ヘクトがブラジル北東部のレシーフェ (Recife) 市およびオリンダ (Olinda) 市で行った2回のフィールド調査 (1992年から93年にかけて13カ月間と95年に3カ月間) のデータに基づいて書かれたストリートチルドレンに関するエスノグラフィーである。本書の前書きによると、著者はコロンビア大学でラテンアメリカ・イベリア研究において修士課程を修了し、ケンブリッジ大学で博士号の称号を得ている。多くの NGO で活動するかたわら、ケンブリッジ大学およびケープタウン大学で研究員を勤めた経歴があり、本書が上梓された時点では精力的な研究活動を行っているとのことである。

第三世界の都市問題において、ストリートチルドレンの現象をどのように解釈するかは重要な研究課題のひとつである。なぜなら、この現象は当該社会における経済的・社会的格差によって生み出された都市の貧困問題であるばかりではなく、「子ども」という年齢層にその問題が表出しているがゆえに、貧困世帯における「大人」あるいは「子ども」に対する役割期待と彼らによって構成される家族像を映し出すプリズムとなっており、家族の問題として都市問題を問い直すきっかけを作っているからである。そしてこの現象は、第三世界のみならず先進国にお

ける「子ども期」の再考をも迫る問題となっている。

著者は、このような重層的な問題を解釈するために、通りで生活する子どもたちの言説をエスノグラフィーにまとめ、精力的に彼らの視点を再構成することを試みている。ブラジルのストリートチルドレンにのみ限定するならば、従来の研究では子どもたちと彼らを取り巻く貧困世帯の数量的・統計的分析か、歴史的アプローチからの貧困児童の問題に関心が払われてきたように思われる。本書は一般的にストリートチルドレンと呼ばれる子どもたちのなかでもホームレスチルドレンと呼ぶべき子どもたちの実態を把握しようとするところに特徴があり、その意味において、この領域における先駆的な業績として位置づけられるものであろう。

I 本書の構成

本書の構成は以下の通りである。

序章

第1章 通りについて語る

第2章 通りで過ごすということ

第3章 ホームチルドレン——養育される子ども期と扶育する子ども期

第4章 マザーダムへの裏切り——マロケイロスと通りの「あの生活」

第5章 不快で残酷、そして短い人生——暴力とストリートチルドレン

第6章 ストリートチルドレンの救援、子ども期の回復

第7章 ストリートチルドレンと彼らの「お客さんたち」

結論 ストリートチルドレンのはかない人生

付録 背景——レシーフェ、オリンダ、ブラジル北東部

序章では、著者の問題意識の提示と調査方法および論点の整理が行われ、第1章、第2章でホームレスチルドレンの生活像が描きだされる。第3章から第5章では「子ども」の概念を整理した上で、本書の議論の焦点となる子どもたちの特性をマザーダム

(motherdom)への裏切りと暴力という形でクローズアップさせる。マザーダムとは、「母」を中心とする世帯 (matrifocal family: 以下、母性中心世帯) において子どもたちが彼女の忠告を守りながら世帯に金銭や物資を運ぶことが期待される、という著者の提示する道徳・経済倫理である。「母」には、祖母、継母、伯母、その他の女性が含まれる。続く第6章、第7章では、援助団体の活動が活動主体と子どもたちの両方の視点から論じられ、結論では以上の論考を整理した上でブラジルにおけるストリートチルドレンの社会的意味が浮き彫りにされる。

以下では、各章の主な論点をまとめることにする。

## II 本書の主な論点

著者は、ストリートチルドレンを解決すべき問題として論じる前に「問題」となる個人のエスノグラフィを描き出し、そこから派生する多くの関連項目について議論を引き出すことが重要であり、そこに本書の目的がある、としている。本書を著すための重要なツールとなっているのは、子どもたち主導のインタビュー調査である。この調査法は子どもたちによって「ラジオ・ワークショップ」(oficinas de rádio)と名付けられており、1人の少年がテープレコーダに向かって自分のライフストーリーを語りだしたことがきっかけとなっている。彼らは調査に対して疑心暗鬼を抱くことなく、お互いに質問し合い、自分自身の物語を語り合った、とされる。レシーフェ市当局が行ったサーベイ調査(1993年)によれば、当市のストリートチルドレンの人数は212名。オランダ市における著者の調査(1993年)では22名である。著者のワークショップには50名のホームレスチルドレン・ストリートチルドレンが参加した。その内訳は、男子36人、女子12人、そして女性だと自称する性同一化困難症候群(transvestite)の2人である。このサンプルでは、女子の占める割合が市当局の調査結果の13%よりも高くなっているが、それはジェンダー間の比較を試みようとする著者の意図による。平均年齢は15.5歳。ワークショップ以外にも、1人ずつの対面調査が行われ、補完的な資

料として用いられている。

### 1. ストリートチルドレンの生活像(第1章、第2章)

第1章では、2人のホームレスチルドレンのライフストーリーが語られ、アイデンティティ、暴力、援助施設とストリートチルドレンとの関係など本書の中心的なテーマが開示される。2人の事例(13歳男子と17歳女子)は極めて明白なコントラストをなしているが、「母」に対する敬慕の念が語られること、厳しい状況で自分自身で生活の糧を得て生きていること、母性中心世帯で育ち、援助施設での生活経験があること、暴力の犠牲者であり犯罪者でもあること、といった著者がストリートチルドレンと呼ぶ根拠となる共通性を持っている。

第2章では、子どもたちの属性、家族やこれまでの同居者、援助施設での滞在経験、食料や衣服の調達方法、売春、妊娠経験と性病・エイズ、麻薬・シンナーなどに関してストリートチルドレンの全般的な生活像が参与観察によって得られたデータをもとに整理されており、第1章を補完する構成となっている。子どもたちは、たいいてい集団で見かけられるが、集団は組織化されることはない。彼らは「通りにはボスはいない」として、誰の指図も受けないで個人の意志のままに行動しようとする意識を持っている。通りの生活は苦痛を伴った孤独な暮らしと強力な連帯に特徴づけられるが(p. 46)、連帯の持つ意味はジェンダーと年齢の差によって異なっている。

### 2. ストリートチルドレンの特性(第3章～第5章)

子どもとは、無力で従属的という特性を普遍的に持つがゆえに保護されて幸福に暮らすことのできる存在だとする見方と、社会的コンテクストに応じて形成されるがゆえに可変的な存在であるとの見方が存在する。前者はユニセフに代表される子どもの援助を支える理論的な核を形成するものであり、後者は社会人類学や歴史学において議論され支持されてきた子ども像である。後者の視点はさらに、子どもは大人文化が書き込まれる前の白紙状態(tabula

rasa)の存在であり成人の社会構造を再生産する存在であると見なす(構造)機能主義人類学の立場と、子どもを自立性を持った社会的アクターとして理解するマーガレット・ミード(M. Mead)やルース・ベネディクト(R. Benedict)らの立場に分けられる。著者のエスノグラフィーは、子どもを自立的な存在であると見なす立場に立っている。

以上の視点に立って、第3章ではブラジル北東部の都市部でみられる、「養育される子ども」(nurtured childhood)と「扶育する子ども」(nurturing childhood)という相対峙する2つの子ども像が理念型として描き出される。前者は、家庭で親の庇護を受けて成長する子供であり、後者は、働いて家計を助ける子供である。2つの子ども像の決定的な差を生み出す根拠は、幼少の頃からマザーダムに対する重大な責任を負わされているか否かにある。しかし、両者は共に家で生活する「ホームチルドレン」と呼ぶ存在である。

第4章では、第3章で議論したホームチルドレンとは異なる、「ホームレスチルドレン」が検討される。彼らは、自らをマロケイロス(maloqueiros)であると認識し、著者はこれがストリートチルドレンのアイデンティティであると見なす。マロケイロスとは、厄介者であるのみならず、ファヴェーラ(favela:貧民窟)においても「シンナー遊びの常習者」や「スリ」となじられ、追放されるべき者だという意味合いを持ち、ホームチルドレンとは明確に区別される。彼らの家での寝場所は貧民窟の狭い部屋の床であり、通りとそれほどの差がない。しかも家にいるよりも通りにいた方が食事にありつきやすいという利点がある。子どもたちは通りで「シンナー遊び」(cheira-cola)に手を染め、ひたくりによる「間違ったお金」(dinheiro errado)を稼ぐ自分たちの生活を「(反社会的行為をやる)あの生活」と呼び、著者はそれを母と共に暮らす「家」の対概念として位置づける。道徳・経済論理としてのマザーダムを裏切ったストリートチルドレンの姿は、子ども自身の選択の結果である(p. 117)。

第5章では、子どもたちと暴力が論じられる。暴力こそがストリートチルドレンとホームチルドレン

とを峻別する。従来「皆殺しという静かな戦争」と呼ばれる、殺人部隊や警察官による通りで生活している子どもの殺戮が非難されてきたが、子ども同士の殺害についてはほとんど報告されてこなかった。著者の調査では、1回目の13カ月間の滞在で確認した死者8人のうち、6人が仲間によって殺害されており、通りで生活している子どもが殺人部隊によって殺された事件は確認されていない(p. 141)。一方、多くのブラジル人がストリートチルドレンを恐れる理由は、法による子どもの権利の保護にある。たとえば555件の児童による犯罪のうち538件(97%)が刑に処されなかったという報告がある(『オ・エスタード・デ・サンパウロ』[O Estado de São Paulo] 紙 1995年. p. 143)。子どもが法の前に不死身であるという認識が、皮肉にも大人による彼らの殺害という違法の処罰に繋がっているといえる。

### 3. 援助団体の活動(第6章, 第7章)

第6章では、政府機関やNGOなどのストリートチルドレンの援助団体が議論の俎上にあげられ、それらの団体の活動が検証される。子どもたちへの援助は1980年代半ばから全国レベルで増加してきており、レシーフェとオリンダにおいても援助団体がざらりと勢揃いして、いわばサービスの供給過剰ともいえる状況が見られる(Table 5, pp. 150-151)。しかしNGOの経営は経済的に苦境に立たされている。援助活動は、次のように類型化される。(1)回復:レシーフェのほとんど全ての援助団体は、通りで生活する子供たちの失われた子ども期を回復させるために、彼らに学校教育を行い、働く子どもへと立ち直らせることを目標にしている。(2)救済:ストリートチルドレンがこの世の地獄に住んでいるという考えに基づき、先進国の子どもに近づけるよう救済する。この活動は「Save the Children」という標語で括ることができ、ジャーナリズムに受けが良く、先進国にアピールしやすい。(1)と(2)は、ストリートチルドレンを変えることが目指されるが、(3)ではブラジル社会の不公正の変革を問題にする。(3)市民権:全国ストリートチルドレン運動(Momimento Nacional de Meninos e Meninas de Rua)では、パウロ・フ

レイレ (Paulo Freire) の「非抑圧者の弱さからわき起こる力にこそ解放への強さがある」(p. 168) という思想に則って個人の権利を主張していることが読みとれる。しかし、平等を要請する市民権という考え方はブラジル文化に馴染みにくい。それは家父長的な施しの授受を倫理的な基盤に持つ、ブラジルの伝統的な思考様式であるアシステンシアリズム (assistencialismo) に対峙するからである。

従来の研究では子どもたちが援助団体をどのようにみているのかについてはほとんど論じられてこなかったとして、第7章でこの問題が取り上げられる。著者は、ストリートチルドレンが援助活動は通りの生活の一部であり、そこから脱出するための方法だとは考えていないことを指摘する。子どもたちにとって主たる関心事は食べ物や衣類、それに寝床という利益の確保にあり、援助団体の目的を達成することではない。子どもたちは援助団体を「お客さん」(freguês) と呼び、子どもたちの「網にかかった魚」(p. 180) であると見なす。彼らはまた、援助団体の支援を受けにくい成人のホームレスと一線を引くためにマロケイロスの行動様式を堅持して子ども期に留まることに固執する。ストリートチルドレンというスティグマは逆説的にも自らのステータスを保護するための一翼を担うという構造を持っている。しかし、彼らは自らの「意志の力」(força da vontade) で通りでの生活からいつかは抜け出したいとも考えている。そのためには当面の必需品を「お客さんたち」に依存しなければならず、ここでもパラドクスが働くことになる。

#### 4. ストリートチルドレンのはかない人生 (結論)

「モラルエコノミー」の視点によると、経済行為は社会正義や義務それに互酬性の観念によって生まれるものであり、「扶育する子ども」はそうした観念を持つことで家に留まっている。子どもがホームレスチルドレンになることは、貧困層の子どもたちの家族における義務の不履行を意味している。ホームレスチルドレンがマザーダムを裏切ったことにたいする自責の念を捨てていないのは、この理由による。本書のインタビューで登場した子どもたちのそ

の後は、1995年の追跡調査と97年に著者に届けられたニュースによって綴られる。彼らの多くは虐殺、投獄生活、精神病院入院、交通事故死などの悲愴な運命を辿っているが、一方で、僅かだが援助施設によって生活の矯正に成功した子どもたちもいる。最後に、次のようにブラジル社会におけるストリートチルドレンの位置づけを述べて本書が結ばれる。

「ブラジルの都市における商業地区や中産階級の居住区で見かける、扶養してくれる人もなく怒りを抱えた貧しい子どもたちの存在は、富裕者にとって自己と貧困者との地理的隔離を脅かす脅威である。そして、子どもたちがときどき惹き起こす暴力は、ヒエラルキカルな階級構造と大人と子どものあいだに存在する力の割り振りを脅かしている。暴力はストリートチルドレンに力を与えると同時に、彼らを報復の対象に仕立て上げる。ストリートチルドレンを変えようとする努力は、(中略) いわゆる子ども期という観念からかけ離れている、脅威を与える逸脱者としてのストリートチルドレンを矯正し、通りから家へ、『あの生活』という放蕩の世界からマザーダムの用心深い眼差しの中へ引き戻そうとする試みとして見なすことができるのである」(p. 213)。

### III 本書へのコメント

まず、ストリートチルドレンとは誰のことを指しているのかという問題がある。第3章でホームチルドレンについて論じられる以外は、ホームレスチルドレンに関する議論が中心となっており、115ページでは「ストリートチルドレンとは、18歳以下で普段通りで寝泊まりしている人々のことである」と語られている。読者の立場から言うならば、著者が本書で主張するストリートチルドレンとはホームレスチルドレンのことである、との印象を受ける。しかし、ホームチルドレンとして描かれる「扶育する子ども」とは、従来ストリートチルドレンのひとつのあり方として言われてきた children “in” the street に照応しており、たとえば65ページには「多くのレシーフェのストリートチルドレンは彼らの母親の元にお金を運んでいる」と書かれているように、著者

も彼らをストリートチルドレンとして扱っている。従って、本書におけるストリートチルドレンとは、「扶育する子ども」とホームレスチルドレンの両方である。それゆえ読者はストリートチルドレンの概念に関して混乱を抱く。第3章と第4章で分散して行われた子ども期の議論を導入部分で、例えば図式化しながら展開するという構成にすれば、このような概念に関する混乱を招くことはなかっただろう。

著者は、コロンビアにおける先行研究 (Lewis Apter, *Street Children of Cali*, Durham, N. C.: Duke University Press, 1988) を取り上げ、コロンビアとブラジル北東部に共通して見られる母性中心性 (matrifocality) という家族の特性は、通りで生活する子どもを生み出す要因に関わっているが、それぞれの地域で子どもと母性中心性のかかわり方に意味の違いがみられることを指摘した (第4章, p. 107)。本書では地域間のストリートチルドレンの比較に関わる問題として、子どもと母性中心性のかかわり方はブラジル国内の他の地域ではどうなのか、ということについて触れられていない。また、子ども同士の殺戮という問題に関してはどうか、レシーフェでは援助の供給過剰がみられるにしても他の地域ではどうかということも取り上げられてはいない。著者は問題提起において調査地の選定の理由を述べていないが、本書において国内の他の地域との比較が考慮されたならば筆者の扱った事例のブラジルにおける特殊性と代表性が明らかになったと思われる。

著者は、ストリートチルドレンのアイデンティティおよび行動の分析に関してマザーダムと母性中心世帯を議論の中心に据えているが、本書では家族に関する調査が欠落している。子どもに対するインタビューは50人のうち8人が彼らの家庭で行われており、また2人の母親のインタビューが載せられてい

ることから、家族の調査は可能であったと思われる。子どものインタビューでは「お父さんは誰でもなれるけれども、お母さんは1人だ」(p. 91) というように一時的な存在として父親が位置づけられ、継父による虐めや彼らにたいする反感も語られており (p. 28, 55), 「父」の問題は母性中心世帯と、その世帯でのストリートチルドレンを考察する上で重要である。そして、調査に応じた67%の子どもは、兄弟の中では唯一本人がストリートチルドレンとなっているということから (p. 65), 彼らの兄弟における位置と家族において彼らにかけられる役割期待がいかなるものかという問題も重要な議論すべき点であろう。それによって結論におけるモラルエコノミーの議論の説得力も増しただろう。

ストリートチルドレンという問題の深刻さから、本書は全般的にネガティブなイメージで彼らの存在が語られる。しかしその原因は、単に問題の本質にあるというよりも、本書の分析視角にあるように思われる。著者は子どもを社会的な行動主体として位置づけたことによって、結果的に彼らを出口の見つからない袋小路に押し込む議論を展開することとなった。著者が論じているように、ストリートチルドレンは周りの環境に依存していかなければならない存在である以上、社会構造の視点からこの問題を問い直さなければ読者に問題の閉塞感を与えるだけで終わってしまう。しかし、本書の分析視角を用いたからこそ、子供たちの「意志の力」だけでは決して抜本的な問題解決に繋がることはないということを明らかにしえたのであり、解決策を見出すことが目的ではないという著者の問題意識は、その意味において成功を取めたといえるのではなかろうか。

(筑波大学大学院博士課程哲学・思想研究科)